「否え、貴方の種が悪いのや」
「イヤ、貴様の畠が悪いのぢや」
と百姓の喧嘩みたいに云ふて、お互に呟いて居りますが、どうぞして假令畠が悪ふても、又種が悪ふても、芽生へを見たいものぢやと所の氏神様へ日參を致しまして、祈願を籠めましたが、不思議や其の月から女房は身重になりました。夫婦の者が悦んで居る間に十月經つてホギャアーと生れましたのが、丸々とした女の兒。
「久兵衞さん、女の兒ぢやぞへ」
「イヤ女の兒でもだんない、マア有難い事ぢや」
と此の子の名をお露とつけまして、蝶よ花よと育てゝ居ります間に、光陰は矢の如く、十七才の娘盛りになりました。至つて縹緻の美い上に賢い娘で、讀書を教へても、裁縫をさしても、一を聞いて十を悟ると云ふ位い、そこで兩親はどうか程よい婿があつたら配遇して、自分等は隱居したいと思ふて居りましたが、善い事は二つ無いとか申しまして、母親は當年四十五歳、不圖した事から病の床に就きまして昨今ではお醫者さんが手を放そうと云ふ様になりました。
「どうでおますやろ、到底も六ヶ敷うおますか、何んぞ良い藥は無いもんだすか」
「されば無い事はないが、高藥を盛りとうても知つての通りの貧乏醫者愚老が立替へると云ふ譯にも

いかずそりや此の藥代が出來れば癒らぬ事もないが、どうにか都合が出來そうなものぢや」
と云ふ醫者の言葉に久兵衞も、どうしたものかと垂首て思案顔、娘は見兼て、
「お父さんへ、お母さんの病氣到底も癒らねば仕方がないが、何卒モウ一遍癒してお上げ申したい、と云ふて其のお藥を買ふには大枚のお金子が要るとの事、どうぞお父さん、妾の様な者でも廓へ身を沈めて、其のお金子でお藥を買ふて飲して上げておくれやす」
「オヽよう云ふてくれた、コレ婆どん、此の娘があゝ云ふてくれるが、どうしたもんやろかな」
「何を云ふのや、妾は死んでもかまひまへんが、お父さん必ずそんな事はしとくなはんなや」
「けども婆どん、あの様にお露が云ふてくれるのに、癒る事ならそうして、早う體を壯健にして、又稼いだらどうでもなる事ぢや」
と云ふので其處で女房にも得心さして、新町の口入屋金兵衞へ賴み、金兵衞より早速或る樓主へ話込みますと、代物を見た上の相談と云ふので、早速久兵衞が娘を伴れて行きますと、途方もない上玉。
「イヤこれなら至極結構、如何程金子がお入用か知らぬが、まず三年で五十兩は出しまする」
現今の五十圓はさのみ大金でもないが、その頃の五十兩と申しますと大したもので、久兵衞は誠に悦びまして、
「左様なれば親方さん、何卒宜敷うお願ひ致します」